2017年5月21日

中原キリスト教会

　　　　　　　　**「民数記：イスラエルのつぶやきとのがれの町」**

聖書箇所：民数記35:15-28

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日の聖書箇所は民数記というモーセ五書の第4番目の文書の最後の箇所です。民数記は主なる神に対し「聖」即ち清いものであるために守らなければならない律法についてモーセとアロンに告げられた部分とイスラエルの民が荒野を放浪している間に発生した多くの問題について述べています。

まず、民数記1章にはイスラエルの部族についての記述があります。イスラエルの十二部族と言うのは、ヤコブの十二人の男の子供がそれぞれ部族をなすことにより発生したとされています。妻レアによる子がルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンの6部族、妻ラケルによる子がヨセフ、ベニヤミンの2部族、奴隷女ビルハによる子がダン、ナフタリの2部族、同じくジルバによる子がガド、アシェルの2部族で合計12部族です。しかし、この内、ヨセフはマナセとエフライムに分かれますのでそれを2部族にすると、合計13部族になりますが、レビ族は特別ですから、これを別にして12部族という言い方もできます。その後、イスラエルが王国を形成しソロモン王の後、南北に分裂します。北がイスラエル王国で、南がユダ王国です。ユダ王国はユダ族、ベニヤミン族、レビ族の3部族で形成され、イスラエル王国は残りの10部族です。これが、北王国の滅亡とともに歴史の舞台から消え、所謂「失われた10部族」になります。この一部が中国経由日本に渡って来て住み着いたという話もあります。中国初の統一王朝秦とその血筋が京都の太秦に住んだ秦（はた）氏だというのです。しかし、12部族というのも出エジプトの民だけではなく、既にその地に住んでいた民で主なる神ヤーヴェ信仰に同意した部族を含んでいたと考えられますし、十二部族の地理的境界線はそんな明確なものではなかったのですから、ユダ王国の3部族とそれ以外の10部族を明確に分けることなどできません。また北王国の滅亡であっても他の地に散っていったのは上層階級の人々だけであり一般の民衆はその地に留まったのです。従って失われた10部族というのは物語としては面白いのですが、根拠に欠く、と言わねばなりません。北王国の指導者で離散の民となった人々の行った先として、アフガニスタン、エチオピア、中国あたりにはユダヤ人が住みついていたことは実証されています。これら以外では話としてはインド、ミャンマー、朝鮮、日本、イギリス、アメリカというようなところもあります。

民数記の前半の「聖」であるための律法の部分では良く知られた箇所がいくつかあります。6章に「ナジル人の誓願」の話がありますが、有名な箇所の一つです。ナジル人というのは、全身を主なる神にささげた人々のことです。「nadi:r」というのは「聖別する」「分離する」といいう意味です。聖なる人として一般の人から分かたれた人です。ナジル人が守らなければならないことが6:3-8にあります。「ぶどう酒や強い酒を断たなければならない。ぶどう酒の酢や強い酒の酢を飲んではならない。ぶどう汁をいっさい飲んではならない。ぶどうの実の生のものも干したものも食べてはならない。/彼のナジル人としての聖別の期間には、ぶどうの木から生じるものはすべて、種も皮も食べてはならない。/彼がナジル人としての聖別の誓願を立てている間、頭にかみそりを当ててはならない。主のものとして身を聖別している期間が満ちるまで、彼は聖なるものであって、頭の髪の毛をのばしておかなければならない。/主のものとして身を聖別している間は、死体に近づいてはならない。/父、母、兄弟、姉妹が死んだ場合でも、彼らのため身を汚してはならない。その頭には神の聖別があるからである。/彼は、ナジル人としての聖別の期間は、主に聖なるものである」とあります。ぶどう酒を遠ざけること、髪の毛を切らないこと、死体に近づかないこと、です。母親が子供を得るのにナジル人として主なる神に捧げると誓願し、特別な能力をもって生まれてきた人物として士師の一人怪力サムソンやイスラエルの初代の王サウルに油を注いだ預言者サムエルが有名です。新約聖書ではバプテスマのヨハネがナジル人と推測されています。ルカ福音書1:15でバプテスマのヨハネは「ぶどう酒も強い酒も飲まず、まだ母の胎内にあるときから聖霊に満たされ」と言われています。使徒行伝18:18で「パウロは一つの誓願を立てていたので、ケンクレヤで髪をそった」と言われていますので、パウロはケンクレアで髪を切るまではナジル人としての誓願を立てていた、と考えられます。今でも敬虔なユダヤ教徒には髪を長くしている人がいます。聖なる人であるためには、どうしてこのような律法を守らねばならないのかは説明されていません。酔っぱらったりすると聖なる人とは言えないだろう、とか死人に近づいたり触ったりすると汚れた状態になる、というのは解らないでもありませんが、髪の毛を切らないことと「聖なる」ことと何が関係あるのは合理的説明はつきません。ユダヤ教の律法はそのように理由の説明はむずかしいものが多々あります。“とにかく、神様がそうおっしゃっているから”としか言えない律法が多々あります。驚くべきことは、ユダヤ人はそれをめんめんと数千年守り続けてきていることです。何らかの理由でこれらの律法を破る結果になった場合にこれを回復する手順についても6章で詳しく書いています。そしてこの章の最後にアロンがイスラエルの民を祝福するとき、こう言いなさいという祝祷の言葉が出てきます。6:24-26です。お読みします。『主があなたを祝福し、 あなたを守られますように。/主が御顔をあなたに照らし、 あなたを恵まれますように。/主が御顔をあなたに向け、 あなたに平安を与えられますように』。礼拝の最後の祝祷で言われる言葉です。

　イスラエルの十二部族とよく言われますが、イスラエルにはレビ族という特別な部族が居ます。モーセ、アロンが所属している部族であり、祭儀を司る部族であり、祭司を出す部族です。イスラエルの各部族は約束の地カナンに入る前に主なる神より土地を与えられます。嗣業といわれています。しかし、レビ族には嗣業は与えられず、他の部族の嗣業の中の町にレビ族の住むところが定められます。イスラエル民族としての信仰を守り抜くためには祭司職の人間が全国に居なければならないことからレビ族についてだけ特別な扱い、とされたのです。もちろん祭儀のやり方や、そこで使用する物についても律法の定めがありますがレビ人そのものを聖別することも定められています。8:7-8では「あなたは次のようにして彼らをきよめなければならない。罪のきよめの水を彼らに振りかける。彼らは全身にかみそりを当て、その衣服を洗い、身をきよめ、/若い雄牛と油を混ぜた小麦粉の穀物のささげ物を取る。あなたも別の若い雄牛を罪のためのいけにえとして取らなければならない」と言われ、13節では「あなたはレビ人をアロンとその子らの前に立たせ、彼らを奉献物として主にささげる」といわれ、レビ人そのものを奉献物として主なる神に捧げる、と言われています。主の言葉として「すべてのイスラエル人のうちで、最初に生まれた初子の代わりに、わたしは彼らをわたしのものとして取ったのである」と述べられています。この水できよめる、というところは、バプテスマのヨハネの洗礼に通じているものです。罪に死に、命に生まれ変わる式としての洗礼は、実はレビ人を主なる神に奉献する時の清めの儀式に由来するものだったのです。これで比喩的に言いますと、洗礼とは神様に捧げられるための清めの儀式なのだ、ということができます。また、19節では「わたしはイスラエル人のうちからレビ人をアロンとその子らに正式にあてがい、会見の天幕でイスラエル人の奉仕をし、イスラエル人のために贖いをするようにした」とありますから、洗礼によりキリスト者となった者はレビ人同様、「イスラエル人の奉仕をし、イスラエル人のために贖いをする」ことが求められている人々である、とも言えるでしょう。

　10章以降の荒野での放浪中の出来事のなかでは、繰り返されるイスラエルの民のつぶやき、不平、不信仰、反逆が顕著です。これを抑えることができなかったため、モーセはカナンの地に入ることを主なる神に認められず、その手前のところで死ぬ運命が与えられるのです。モーセの兄弟、祭司のアロンもモーセより早く亡くなります。イスラエルの民のつぶやき、不平、不満の最初は11:4-6に述べられています。「また彼らのうちに混じってきていた者が、激しい欲望にかられ、そのうえ、イスラエル人もまた大声で泣いて、言った。「ああ、肉が食べたい。/エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、たまねぎ、にんにくも。/だが今や、私たちののどは干からびてしまった。何もなくて、このマナを見るだけだ」と言ったと記されています。モーセは神に“なんとかしてください”と祈ります。神は怒りをあらわにしつつも大量のうずらを与えます。肉を食べたい民はこれを食べ疫病にかかり、惨憺たる結果になります。また、カナンの地に探索に出した人間が戻ってきて、“この地にはすごく強そうな民が居る”ということを告げると、イスラエルの民は“そんな所に侵入するなんていやだ”と言い出します。14:1-4では「全会衆は大声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。/イスラエル人はみな、モーセとアロンにつぶやき、全会衆は彼らに言った。「私たちはエジプトの地で死んでいたらよかったのに。できれば、この荒野で死んだほうがましだ。/なぜ主は、私たちをこの地に導いて来て、剣で倒そうとされるのか。私たちの妻子は、さらわれてしまうのに。エジプトに帰ったほうが、私たちにとって良くはないか。」/そして互いに言った。「さあ、私たちは、ひとりのかしらを立ててエジプトに帰ろう」」と言ったと記されています。主なる神は、このような民はすぐ滅ぼしてしまおう、とします。しかしモーセは“ここで滅ぼすと、他の民族は主が選ばれた民をカナンの地に導き入れることができなかったので滅ぼしたと、言うでしょう”などと言って、主に懇願します。主なる神は、このイスラエルの不信仰を赦されますが、40年のあいだ荒野をさまよい、カナンの地に入らせないこと、また主なる神を信じ、カナンの地に入ろうと主張した若いイスラエル、カレブとヨシュアの二人を除いて、イスラエルのすべての人々はこの荒野で死を迎えなければならない、と宣言します。モーセもカナンの地には入れない、こととなります。

　また、モーセが主なる神の律法を民に伝えていると、レビ族の子孫コラはルベン族の子孫のダタンとアビラムが共謀してモーセに反旗を翻します。彼等はモーセとアロンに言います。「あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、主がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは、主の集会の上に立つのか」と言いま。要するに、モーセの告げているのは、本当に主なる神の言葉なのかは疑問であり、モーセが単に偉ぶって言っているだけではないか、という不信感を言い表したのです。コラは祭司職を受け継ぐレビ族の出です。モーセはコラがレビ族から出て祭司職を果しているアロンの権威を奪おうとしている、と非難します。分を越えているのは、コラの方だ、と言います。また、共謀しているダタンとアビラムはルベン族の出身です。ルベン族はイスラエル12部族の長子とされている部族です。その部族から反逆者が出てきたのです。16:13-14で「あなたが私たちを乳と蜜の流れる地から上らせて、荒野で私たちを死なせようとし、そのうえ、あなたは私たちを支配しようとして君臨している。それでも不足があるのか。/しかも、あなたは、乳と蜜の流れる地に私たちを連れても行かず、畑とぶどう畑を受け継ぐべき財産として私たちに与えてもいない。あなたは、この人たちの目をくらまそうとするのか。私たちは行かない」と言います。モーセは怒り、主の前でいずれが正しいか決着をつけてもらおう、と言います。一行の天幕の前に立ちます。主の言葉がモーセに臨みます。24節です。「この会衆に告げて、コラとダタンとアビラムの住まいの付近から離れ去るように言え」との言葉です。そのようにしました。6:31-33では「モーセがこれらのことばをみな言い終わるや、彼らの下の地面が割れた。/地はその口をあけて、彼らとその家族、またコラに属するすべての者と、すべての持ち物とをのみこんだ。/彼らとすべて彼らに属する者は、生きながら、よみに下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは集会の中から滅び去った」と記されています。地震で地割れが起きたのでしょう。そこでモーセはアロンの子のエルアゼルに命じて。火でその所を清めることを行わせます。しかし、問題はこれで終わりません。41節で「その翌日、イスラエル人の全会衆は、モーセとアロンに向かってつぶやいて言った。「あなたがたは主の民を殺した。」と記されています。主なる神は再びこの会衆を滅ぼすのでモーセは離れなさい、と言われます。ここで、モーセが採った態度は46節に述べられています。「モーセはアロンに言った。「火皿を取り、祭壇から火を取ってそれに入れ、その上に香を盛りなさい。そして急いで会衆のところへ持って行き、彼らの贖いをしなさい。主の前から激しい怒りが出て来て、神罰がもう始まったから」と言われています。これでも民を見捨てず、贖いの執成しをするようアロンに頼むのです。アロンはそうします。しかし、神罰が始まっていたので多くの人が死にます。14,700人と書かれています。1:46でイスラエルの民の総数は603,550人と書かれていますし、荒野の放浪の中で人数も減少していたでしょうから、この神罰により死んだ者の数はかなりの比率であったと思われます。

　ことこと左様にイスラエルの不平、不満は耐えることがありませんでした。ここに述べられているのはイスラエルの歴史ですが、私たちは皆、それぞれの人の出エジプトを持っています。主イエスと共に在る平安に到るまで、いろいろな苦難を経験しています。洗礼を受けた後もいろいろな苦難に直面したはずです。その場面、場面で主なる神につぶやく時があったに違いありません。モーセはイスラエルが苦難に直面し、不平、不満を呟くとき、なんと執成しの祈りをしてくれたのです。私たちには復活の主イエス・キリストがいらっしゃいます。モーセやアロン以上の方です。私たちは、不平、不満を言う信仰心の薄い者です。しかし、主は、執成しをして下さいます。裏返して言えば、不平、不満は神様に言いたいだけ言ったらよいのです。百ぺん言っている間に、主の導きが何らかの形で示されてきます。主の言葉に聞く姿勢だけ持って居れば必ず、言葉が響く時があります。復活の主イエスは罪の誘惑に勝てない私たちに導きを与えられるのです。

　本日の最後はお読みいただいた35章です。ここはカナンの地を望みつつ、主がモーセを通し、それぞれの部族の住むべき地を指定したのちに出てくる箇所です。35:11で「あなたがたは町々を定めなさい。それをあなたがたのために、のがれの町とし、あやまって人を打ち殺した殺人者がそこにのがれることができるようにしなければならない」と言っています。十戒によって殺人は禁止されており、殺人者は死刑が原則ですが、誤って人を殺すようなことになった者には血の復讐から逃れる町を用意しておかねばならない、という律法です。のがれの町と言います。実は、ヨシュア記の20章にやはり逃れの町に関する記述があります。そこで6つの町が指定されています。ナフタリ族の嗣業とされていたガリラヤ湖付近のケデシュ、エフライム族の嗣業地のシェケム、この町は当時からその地の中心的町でした。それからユダ族の嗣業地にあるヘブロン。この町はアブラハムの時代から有名な町です。それからイスラエルの長子ルベン族の嗣業地のベツェル、ヨルダン川東側の嗣業地を得るガド族のギルアデの地のラモテ、北のバシャンの地を嗣業地とされたマナセ族の地ゴラン、の合計6つの町が逃れの町に指定されています。ヨルダン川の西に３つ、東に３つです。イスラエルの地とされた地域の全体に広がっています。この逃れの町の伝統は古代のエジプトやギリシャにもあったようです。アジール権と称し、今でも、男の暴力から逃れるための母、子の逃れる施設のような変形的な形で続いています。時の権力に反抗する者を匿う教会とか難民の逃れの場所としての大使館などもこの流れにあるものです。今日の聖書の箇所から、逃れの町につき記された箇所から注意すべき点を申し上げます。

　まず15節で「在留異国人」も逃れの町利用の対象者に含めていることです。十戒の規定は基本的にイスラエル民族の中でのものですが、この逃れの町の規定については「在留異国人」を含んでいる、という点です。旧約聖書の中には異邦人に対し排斥的な流れと、これに友好的な流れと両方が交錯しています。この箇所はその異邦人への差別なき取扱いを命じた箇所です。この精神は主イエス・キリストにおいて完全な形で示されます。直接の関係ではありませんが、最近のヘイト・スピーチは大問題です。在日朝鮮人に対するあの差別的言動は日本人の恥です。日本の植民地支配の結果としてこのような立場に置かれた人々に対する悔い改めの姿勢は全くありません。言論の自由の保護範囲ではありません。本来であれば日本国籍を持って居るべき在日の人々に対し、あの差別的態度は赦されるものではありません。また21節では「敵意をもって人を手で打って死なせるなら、その打った者は必ず殺されなければならない。彼は殺人者である」とあります。故意によって殺人を犯した者はこの逃れの町の恵みを享受することはできない、というのです。刑法で言えば過失致死罪の場合にのみ逃れの町で保護される、という訳です。私が問題にしたいのは、現代の戦争において、無人飛行機による爆撃とかロボットによる戦争が研究されている、という現実です。これは、殺人を意識的に行っていることを曖昧にさせ、人間が罪意識を感じさせずに殺人をやれるようにしようとするものです。逃れの町の規定は故意と過失を峻別することで成り立っています。人類最大の罪の表れである戦争においてこの区別を曖昧にし、罪を罪と感じなくしようと言うのです。それこそ、罪の巨大化です。こんなことを主なる神が許すはずはありません。

逃れの町の最後は28節です。「その者は、大祭司が死ぬまでは、そののがれの町に住んでいなければならないからである。大祭司の死後には、その殺人者は、自分の所有地に帰ることができる」とあります。逆の面からの表現ですが25節には「彼は、聖なる油をそそがれた大祭司が死ぬまで、そこにいなければならない」と言われています。また32節では「のがれの町に逃げ込んだ者のために、贖い金を受け取り、祭司が死ぬ前に、国に帰らせて住まわせてはならない」と言っており、大祭司の死が過失殺人を犯した人間が許され、逃れの町から自分の国に帰ることができる、とされているのです。ヨシュア記の方でも20:6に、「その時の大祭司が死ぬまで、その町に住まなければならない。それから後、殺人者は、自分の町、自分の家、自分が逃げて来たその町に帰って行くことができる」とあります。どうしてこんなことが許されるのでしょうか。命を与え、取り去るのは基本的に主なる神のなせる業です。従って逃れの町で生きるのを許すのも神の裁量です。大祭司というのはイスラエルのための執成しをする人物です。その人物の命を主なる神が取り上げた時、過失致死罪を犯した者の罪を赦すと主なる神はおっしゃられているのです。この裏には、大祭司の命が贖罪の供え物になっている、ということです。ここまで考えると、これは、主イエス・キリストの贖いの死そのものだ、ということが解ります。「ヘブル人への手紙」で、主イエスを大祭司になぞらえていますが、それは、のがれの町で生きながらえていた我々をその贖いの死により罪なきものとしてくださった主イエスの業を指し示しているのです。のがれの町に在る者の罪をゆるして下さる救い主をイスラエルの民はずーと願ってきました。その望みが主イエスの業にて結実したのだ、ということが出来ます。

イエス様が私たちの「のがれの町」になって下さることは福音書の言葉で示されています。マタイ福音書11:28です。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と約束されています。休ませていただきましょう。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の祈りの時をありがとうございました。モーセは執成しのためにカナンの地に入ることを犠牲としました。私たちもこの世の罪を神様にとりなす者とさせてください。また犠牲を払う勇気をお与えください。神様はイスラエルの民にのがれの町を用意してくださいました。この心は今に至るまでめんめんと続けられてきている事感謝申し上げます。私たちののがれの町となって下さっている復活の主を述べ伝える者とさせて下さい。救い主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）